



TITLE:

<批評・紹介> 和田清著「支那」

AUTHOR(S):

小川, 茂樹

CITATION:

小川, 茂樹. <批評・紹介> 和田清著「支那」. 東洋史研究 1937, 2(3): 262-263

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138735>

RIGHT:

批評・紹介

支那

和田 清 著

和田教授の明代滿蒙史に關する専門の業績は既に學界に不動の位置を占めてゐる。又その歴史地理方面の蘊蓄も近時本誌一卷五號の「秦の閩中郡に就て」の論文に於て一端を示されてゐる。然し教授は此等の専門の分野以外、東洋史學一般に廣く關心を持ち、内外の輩出する新研究に不斷の注意を拂はれ、その東京大學に於ける東洋史概説が博綜を極めてゐることは、遙に風聞するのみであつた。今東洋思潮講座によつて堂々二百頁に跨る待望の教授の支那史概説を得たことは學界の歡びである。本篇は著者の斷られる如く、那珂博士の支那通史の影響多く、政治史的記述等そのまゝ據られてゐる箇所が多い。然し近時目覺ましい發展途上にある日本支那史學界の多數の論文を出來得る限り取り入れられ、その引用文獻は豊富を極めてゐる。先づ著者の博識とその周到の用意に

敬服の念を禁じ得ない。この點に於て、嘗て本誌三號に内藤戊申氏の紹介した岡崎博士の「支那史概説上」の専ら獨自の史觀を盛られたのと好對照を存し、何れも昭和の東洋史學を代表する名著と云へよう。教授には昭和五年に公けにされた「歷史上より見たる支那民族の發展」(雄山閣發行東洋史講座所收)の論文がある。本概説はその性質上論述多岐に互つてゐて、一讀趣旨を窺ひ難いが、之を貫徹するテーマは前論文に論ぜられた漢民族の地域的發展に伴ひ、之に把持せられる支那文化の擴大と云ふ事である。漢民族文化の地域的擴充に主として意を用ゐられた點に著者の歴史地理の造詣が反映し、文化一般或は社會經濟の記述に不滿を感じるものもあらうが、そこに本概説の特色が存在する。教授のテーマの漢民族に保持せられる文化の擴大發展の跡を追求するに當り、漢民族に及ぼした外來民族外來文化の影響が稍過少に評價されてゐる傾向がある。例へば南北朝を一見北族民族全盛時代の如く見えるが、實は漢民族による南方支那開發、北方民族支那化の時代とせられるのは正しいであらう。然し南北朝時代に支那内地に移住し來つた北方民族の數を少數と見積られてゐるが、當時に於ける支那本部の戸

口の減少を考慮するならば實は逆賄を許さない。(世界歴史大系東洋中世史一、三二頁) 北方民族の支那文化受容と共に北方民族による支那文化變改の一面も考へられ、隋唐文化の國際化の素地も見られるのではなからうか。又教授は晉室の南渡に際し江南に移住したものは少數の上流社會の士大夫のみと考へられ、一見上述の趣旨と矛盾する如く見える。士大夫豪族の移住は隸屬民を伴ふ集團的移住が多く、劉宋時に土斷法の如き戸籍改革を必要とした事を見ても、一般庶民の移住も相當の數に上つたのである。その點に於ては漢民族文化の南遷を或程度迄文字通り考へても差支へないのではなからうか。之等は何れも尙將來の研究に待つべき問題である。(小川茂樹)